

Tokyo 2015. 9. 27.

大河洋子様

数年前、大河君はとてつないだと思ふ。address  
を調ふ。年次を著すと思ふにそのころ、通恩(当  
方の調子がわるい)なり。果せぬ事になりしと  
た。今回の執筆はたぬ。遅れし君子事とあり。あ  
たはと申すたぬとたぬなりしとたぬ。申す  
りたぬ。改訂にあたり申すたぬ

昔(1960年未済)ジエネ-フで会合してきて  
たありた。大河君と二人でまずとて(赴き)た  
てた。思いなれりた。以後会合してた。  
確かな記録なきの記念のしるしを。一言、二言  
文にたてた。要門の奥の奥。小エに合つ  
たりた。年々たぬ。今もたぬ。今もたぬ。今もたぬ。  
念にたぬ。と後悔してたりた。

この「進歩文集」には、その頃のあつた心  
一文をたぬと思ふ。四高時代のころ中心  
にして。理研の勤務職員二人のついでに始りた。

ジエネ-フで交際たつたころ、東京回化天と、  
義国化の死後、奥の奥にたぬ。時、  
東京、ついでにたぬ。連絡の  
途にたぬ。過去よりたぬ。

かしの<sup>直</sup>撃なりし。殿に矢おれり。是より先鋒  
に先んじしはたししんまし。

海舟を不に。毛; 加念の予之に以てたしし  
加。大河石の今不也。長生をし下さすなり。

長年の中流河の古説に之を輝し其の  
比代に。一筆致しまし。亦不事也。

東京

尾崎

辺